



## その使命を肝に銘じて

市川市少年野球連盟

会 長 中 川 實

連盟誕生して以来 30 周年の記念の年を迎えました。関係各位の皆様方のご協力ご厚情をいただき続けて参りました。

連盟関係者の一途の想いが実を結び、誠に感謝を申し上げる次第でございます。

30 年とは、一つの歴史であります。語るべきことも、余りあるものがありますが、ただ一点この歴史を支えて参りましたことは、関係者が一丸となって、若き次世代を担うべき少年たちの健全な身と心の育成への望みであります。

白球を追い、友情の大切さを知り、更にスポーツの楽しさ、厳しさを体験することです。幼い魂が迷いながらの、これからの人生航路を無事にと願い続けること、このことをおいて、他に使命はございません。

この使命を肝に銘じて、今後とも、連盟の力を結集してことにあたりたいと考えております。

さて本年は野球界に華々しい話題が満ちております。3月のWBCで日本の実に見事な優勝、イチロー選手の印象的な活躍等も、心に鮮明に残っています。国内でも市川在住の巨人軍の小笠原道大選手の頑張りも、そして小笠原杯争奪の大会も、メダルを手にした選手達にとって、素敵な記念にもなり、忘れ得ない思い出にもなったに違いありません。

韓国との交流試合も国際経験を重ねる貴重な行事だったですね。

以前にも何度もアメリカのガーデナにも遠征し、それなりの成果を挙げて参りました。30周年を迎えて新たに連盟の発展をどのように、と見通しを持つべき時機にさしかかっていると思われまます。

市川市の変わらぬご支援と関係各位の皆様のご協力を背に受けて、皆様方のご期待に添って参りたいと念じております。

30年、長くも短くもありません。



## 市川市少年野球連盟設立 30 周年 記念に寄せて

市川市長 千葉 光 行

市川市少年野球連盟設立 30 周年を心よりお祝い申し上げます。

貴連盟におかれましては、本市生涯スポーツの振興・発展に寄与されますとともに、青少年の健全育成に大きくご貢献いただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

歴代の会長、役員の皆様をはじめ、30 年の長きにわたり、連盟の維持・発展にご尽力された関係者の皆様の並々ならぬご努力には、深く敬意を表する次第でございます。

野球は、試合に出場する選手のみならず、チーム全員で勝利を目指す、現代の青少年の心に失われつつある、他人への感謝や思いやりの気持ちを学ぶことができる団体スポーツでもあります。

貴連盟でしっかりと野球を学び、心身を鍛えられた若者たちは、立派な社会人として、世の中に飛び出していただけると確信しております。

また、貴連盟では、市川市と健康都市交流をしております、韓国・原州（ウォンジュ）市の一山（イルサン）小学校と平成 18 年より野球を通じた交流をされております。

国境を越えて交流を図ることは、現代の国際社会を生きていく中で大変有意義なことであり、是非、今後も一層の交流を図り、親睦を深めていただきたいと思います。

どうか、貴連盟におかれましては、この意義ある 30 周年をひとつの節目とされ、さらに活発な活動を展開され、次代を担うたくましい青少年の育成にご尽力いただきますようお願い申し上げます。

結びに、市川市少年野球連盟の益々のご発展と皆様のご健勝を祈念いたします。



## 市川市少年野球連盟設立 30 周年 を祝して

市川少年野球連盟参与  
千葉県議会議員 小島 武久

「市川市少年野球連盟創立 30 周年」おめでとうございます。

昭和 55 年に市川市に誕生し、ここまで育て上げた、中川会長を初めとする役員、審判部、父兄の皆様にはこころよりその労と努力に対し厚く感謝申し上げます。

少年野球で育った少年は、立派に成人され地域社会で活躍されています。今後も野球で培われた精神が少年に引き継がれ、益々連盟が発展される事を期待します。



## 市川市少年野球連盟設立 30 周年 を祝して

市川少年野球連盟顧問  
前衆議院議員 渡辺 博道

市川市少年野球連盟が昭和 55 年 2 月に発足され、創立 30 周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

「青少年健全育成」という大きな目標を掲げ、浮谷貞雄前会長、中川實会長の下、幾多の問題をのり越え県下でも有数の水準を保持し、毎年大会で優秀な成績を残されるなど、立派な今の連盟に成長されました事は、監督、コーチを始め指導者の方々、ご父兄の皆様方の子供に対する温かい愛情と熱心なご指導ご支援の賜物と推察いたし、心より敬意を表する次第です。さぞかし 30 年という節目を迎えられ感激のことと思います。

我が国では、野球は昔から人々に親しまれ人気があり、またチームプレーを大切にするものだけに青少年の健全育成にとって欠かすことのできないスポーツとなっております。そこにはフェアプレーの精神を始めとして社会生活を健全に営む上での基礎が凝縮されていると言っても過言ではありません。忘れ得ぬ思い出と数々のドラマの中、少年野球を通じて学んだ成果はきっと選手諸君の人生に大いに役立っている事と思います。

青少年のいじめや犯罪の増加が問題になっている昨今、いかに正しい教育が大切かを考えさせられます。私もこの問題に真剣に取り組んでおりますが、これからの 21 世紀を担う青少年の健全育成にむけて最善の努力をいたします。

終わりに市川市少年野球連盟の益々の発展と今後の皆様方のご健勝ご活躍を祈念申し上げお祝いの言葉といたします。



## 市川少年野球連盟創立 30 周年を祝して

市川市少年野球連盟顧問

前衆議院議員 藺 浦 健太郎

市川少年野球連盟 30 周年まことにおめでとうございます。

この輝かしい歴史は、野球をこよなく愛する情熱をもった多くの指導者、連盟役員、審判部の皆様、それを理解する父兄そして、技術の向上を目指し、白球を追い求めた少年たちによって築きあげられたもので、心からご同慶に存じる次第であります。

野球では、傑出したプレイヤーを“走・攻・守三拍子揃った名選手”といった言い方をします。走る、打つ、守るは、基本技術であり野球に打ち込む少年たちは、誰もが、各々の技を高めるために練習に明け暮れる訳で、三拍子が優れることは実に素晴らしいことだと思います。

私は、こうした運動力を向上させるほかに“心の鍛錬”。つまり、折り目正しい礼儀、チームメイトや相手チームへの思いやりなど、豊かな精神の醸成も、とても重要だと思っています。

少年野球では、試合の開始時、また終了後、両チーム選手がホームベースを挟んで交わす元気な挨拶。実に清々しく爽やかで、とても心地よく響きます。野球はチームプレーです。チームメイト同志励まし合い、支え合うことにより信頼関係が生まれ、それが一丸となってチーム力が発揮出来るのだと思います。

スポーツの祭典といわれ、世界中の注目が集まるオリンピック。この 2016 年の開催国が本年 10 月に、日本（東京）、アメリカ（シカゴ）、スペイン（マドリッド）、ブラジル（リオ・デ・ジャネイロ）の 4 カ国の中から決定されることになっております。

私も是非日本で開催出来るよう努力したいと思っておりますが、オリンピックを提唱したクーベルタン伯爵（フランス 1863～1924）は、「健全な精神は健全な肉体に宿る」と言われました。市川少年野球連盟に加入する野球チームの少年たちが野球を通じて、健全な肉体と精神を体得され、日本の次代を担って頂きますことを心から念願しご挨拶と致します。



## 市川の球児たち 今 幸せです

市川市少年野球連盟参与 小 出 昭 維

夏季大会の開会式。堂々と1,000人をこえる少年野球選手の入場行進を目のあたりにして、少年野球連盟が55年に生れてから30周年を迎えました。選手たちは勿論、これまで育てはぐくんでこられた監督、コーチの皆さんの何ともいえない喜びにあふれた姿を知り、ご父兄、地域の応援の人々のスタンドからの声援は、わが子、わがチームの成長への期待が球場いっぱい溢れておりました。そして会長はじめ役員、審判団の用意周到な姿勢にこれぞ少年を真直ぐに育ててほしいとする願いだと思われました。

会長の挨拶の中に「連盟は全て、皆さんの活躍をサポートするために、裏方の役割をつとめさせてもらいます。」素晴らしい覚悟の表明であり、未来に生きる子ども達への愛のメッセージでもありとしみじみ感じ入りました。その時、私はある事、30年前のことが思い浮かんでくることをおさえることが出来ませんでした。

当時、少年野球は、江戸川の河川敷で試合を行っていました。夏の炎天下、風の吹くままホコリにまみれ、飲む水も充分でない中、子ども達は白球を追い、バットを振り、汗にまみれて、ゲームに夢中でした。加えて、面倒をみてくれていたのが、子ども会連協のお年寄りの皆さんでした。それこそ野球の知識も経験も充分あるとは云いきれない方々でした。子ども達の健全な育成に燃えた一念です。この光景を江戸川堤から眺めておりました。“これで、いいのか”と感じ“市川の子ども達の夢はこれで”と思いにかられました。

そして、ある日、当時私は教育委員会の青少年課長の仕事をしておりましたが、市長さんにお会いした際に、私はつい、口から“市川の子ども達は余り、幸せではないですね”と発してしまいました。野球好きな高橋市長は、げげんな顔をしておりました。状況説明も本音でした。

それから、子ども達の野球を思う存分、青空のもと、力いっぱい白球を追い続ける環境を整える夢物語がスタートします。

浮谷貞雄氏。当時市川市野球協会の副会長でしたが、少年野球の基礎づくりのために出馬をおねがいしました。協会側の快諾を得て、次に副会長に中川実氏の協力を得ることが必要でありました。説得をいたしました。理事長には阿部氏をと続けました。

さて、今にもどります。夏季大会の堂々の入場式、連盟の人々のボランティア精神による加護のもと、除々に子ども達の白球への想い球児達の魂が、一試合、一試合の中で昇華されていく、素晴らしいパラダイスの世界が実現しているのだと実感いたしました。

アメリカ遠征も、韓国との交流試合にも…。30年間の閃光が、一瞬に走り過ぎました。30周年、あと何年続くのでしょうか。

“市川の少年球児は、今、幸せです”と宣言いたします。



## 祝 30 周年

市川市少年野球連盟参与  
市川市議会議員 松 井 努

市川市少年野球の関係者の皆さまには、益々、ご健勝のこととお慶び申し上げます。この度は、設立 30 周年を迎えられますこと、誠におめでとうございます。

この間、中川實会長をはじめ、歴代の連盟の役員の皆さまのご尽力に対しまして、心から感謝とお礼を申し上げます。又、それぞれのチームの監督、コーチの皆さまのご指導とご尽力に対しましても、お礼申し上げます。

毎年、春、夏の大会が始まりますと、開会式があります。その入場行進と整列する光景の素晴らしさは、見る者を感動させてくれます。

その一糸乱れぬ子供達の行動は、指導者に皆さまの、ご尽力の賜物です。

試合を見ることも多くありますが、選手諸君の野球のレベルの高さに、驚くばかりです。この 7 月 19 日に、福栄中学校の外畑校長先生に誘われて、浦安高校のグラウンドに、市川市内の中学校の夏の大会の準々決勝の試合を見に行きました。試合は 2 対 1 で福栄中学が市川 2 中に勝ちました。延長 10 回サドンデスによる熱戦でした。両チーム共に投手は 2 人ずつ継投の素晴らしい投手戦であり、エラーもほとんどありませんでした。

この中学生の野球のレベルの高さも、偏に、小学生からの市川市少年野球連盟の野球に対する取組みの成果であると思います。

それと、野球少年達を見ておきますと、礼儀正しさ、行動の俊敏性、協調性と、どれを取りましても備わっております。これこそ、大人から次代を担う子供達に継承して欲しいことです。特筆すべきことが、もう一点あります。

私も平成 19 年 8 月にご一緒いたしました、韓国原州市との交流です。

両市の市長の交流から始まりました両市の少年野球の交流試合です。

近くて遠いと言われております両国ですが野球を通じて、両市の子供達が親睦と理解を深めていく事は、大変意義があると思います。

いずれにいたしましても、貴連盟の役目は大変大きいものがあります。

今後共、皆さまのご尽力とご活躍をお願いする次第です。

結びに、貴連盟の益々のご発展と、皆さまのご健勝を心からお祈り申し上げます。



## ご挨拶

読売巨人軍 小笠原 道 大

市川市少年野球連盟設立三十周年おめでとうございます。

私が市川市に居を構えることになってから、早十三年を迎えようとしています。人生の三分の一を過ごしていることとなります。緑が多く、子供達の元気な声がよく聞こえ、日曜日になればバットを背負い自転車で元気に駆け抜ける子供達も見かけることができます。その子供達の輝く目を見てみると、本当に初心に戻れる気持ちになります。

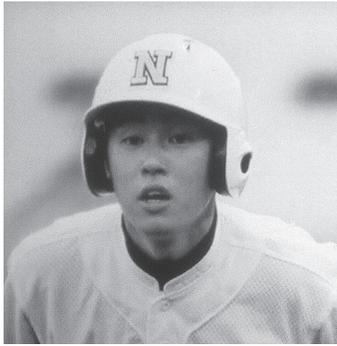
私自身も千葉市のリトルリーグで来る日も来る日も野球に明け暮れていたことを昨日のことのように思い出します。とにかく「野球が好き」この一言に尽きます。練習はきつく辛いものでした。厳しい父と三歳年上の兄とチームの練習日以外もがむしゃらに練習しました。今でも本当は練習をするのはつらい時もあります。しかし、小学生の頃の経験が今の自分を作っているのだらうと思います。

私は野球少年達と話す機会がある時、必ず「お父さん、お母さんの言うことをきちんと聞きましょう」と話します。

土曜日、日曜日、お父さんやお母さんも休みたいかもしれませんが、でもお弁当を作ってくれたり、練習を手伝ってくれたり、子供達のために一生懸命協力してくれているのです。それは地域の大人の人も同じです。監督、コーチ、そしてお手伝いをしてくれるすべての人に感謝をしながら、野球が出来る喜びを感じてほしいと心から思うのです。それはたとえ社会に出てプロの選手になっても何も変わることはありません。周りに支えてくれる人がいるから今の自分があるということ、周りに心から喜んでくれる人がいるから活躍したいと思う気持ち、こういった心をいつまでも大切にしたいと思えます。

そして指導にあたる監督、コーチの方々には、ひとりひとりの個性を存分に発揮できるような環境づくりを実践してほしいと思えます。子供達は敏感に様々なことを感じながら、前へ前へと進む努力をしています。そんな野球に取り組む子供達が一人でも多くなるよう願うばかりです。

一昨年からは小笠原道大杯を開催しています。以前より考えていたことがやっと実現に至り、今年で三回目を迎える運びとなりました。これも市川市少年野球連盟の皆様の強い協力と、市川市のご理解の賜物と感謝しています。この大会が十回二十回と回を重ねられるよう、そして子供達の目標になれるよう自分も励みに頑張っていきたいと思えます。末筆ではございますが、市川市少年野球連盟の益々のご発展を心より祈念いたしまして、私のお祝いのご挨拶とさせていただきます。



## 甲子園の思い出

元 欠真間2丁目イーグルス（現 行徳南イーグルス）  
古 跡 雄 太

この度は、市川市少年野球連盟創設30周年、誠におめでとうございます。

私は、小学2年から野球を始め、大学生になった今でも野球を続けています。当時入部していた欠真間2丁目イーグルス（現行徳南イーグルス）では入部当初からセカンドで試合に出場させてもらい、上級生と一緒に試合に出るということで緊張していたのを思い出します。あまり活躍できた記憶はありませんが、あの時の緊張感は今でも忘れることはありません。その後はチームのキャプテンに指名してもらい、ピッチャーで4番など重要なポジションで野球をプレーすることができ、その経験が今でも多くの場面で役にたっています。

イーグルスは本当に明るいチームで、指導者や父兄の方も親切で雰囲気がとても良く、楽しんで野球をすることができました。練習は土曜日と日曜日でしたが、チームのみんなと野球をできるのを待ち遠しく思ったものです。野球の成績では県大会など大きな大会に出場することはできませんでしたが、イーグルスで野球をしていたからこそ今でも野球を続けられていると思っています。

その後、高校では成田高校の野球部に入部し、3年の春には選抜高校野球選手権に出場することができました。高校での練習は今までやってきた練習とは違い、非常に厳しく生活はほとんど野球中心でした。寮生活で慣れない環境であったため、時には辞めたいと思うこともありましたが、野球を好きという思いから続けることができました。その結果、夢にまで見た甲子園に出場することができたのですから、今では諦めずに続けていて本当によかったと感じています。高校では今まで知らなかった野球の知識や練習方法であったり、挨拶や言葉使いの大切さを学びました。特に人間形成を重んじているチームで、目配り、気配り、心配りについては野球以上に厳しく毎日指導していただきました。それが今の私の基礎になっていることは間違いありません。寮生活では今まで洗ってもらっていたユニフォームなどの洗濯はもちろん、周りのこと全てを自分自身でやらなくてははいけませんでした。それまで当たり前のようによく洗ってもらっていたことの大変さが身にしみてわかり、親のありがたみを感じました。それまでは野球しか知らなかった私ですが、野球以上に重要なことを成田高校野球部で学ぶことができました。

私が大好きな野球を続けてこられたのは、両親をはじめ、指導者の方々、父兄の皆さん、そして連盟の方々等、たくさんの方々のおかげと感謝しております。これからも支えてくださった皆さんへの感謝の気持ちを忘れず、野球を続けていきたいと思えます。

これからも市川市から、野球の大好きな少年球児がたくさん巣立っていくと信じています。



## 甲子園の思い出

—今までの野球人生の中で—

元 あおばペアーズ  
宇崎 圭 祐

自分が「野球」というものに興味を持ったのは、5歳ぐらいの事だった。プロ野球を観るのが好きで、父親とキャッチボールをするのが大好きだった。

小学校1年の時、チームに所属したくて「あおばペアーズ」というチームに入った。4年生の時にエース番号をもらい、6年生までピッチャーをやらせてもらっていた。練習は週1日で厳しくなく、チームも強くなかったが、古賀監督を始め多くのコーチに「野球をする事の楽しさ」を教えて頂いた。試合でチームが勝った時には、皆で喜び合った。大会で自分が投げて僅差でチームが負け、自分が悔し涙を流していた時、選手、コーチ関係なく皆が悔し涙を流していた。コーチと選手がとても仲が良く、チームワークのあるチームだった。学校がある日も、終わったら他のチームの人達も一緒に、よく公園で野球をして遊んでいた。小学校の頃はただ純粋に野球をやるのが好きだった。

中学から「甲子園に行きたい」という夢を抱き、高校は市立船橋に入学した。毎日の練習はとても辛く、野球をやめたいと何度も思った。しかし、甲子園に行きたいという気持ち、そして一緒に辛い練習を乗り越えてきた仲間がいたから頑張ることができた。そして決勝戦、自分がファーストで最後のボールを捕った時、今までにない喜びを感じた。甲子園では1回戦で負けてしまったが、最高の仲間と最高の舞台でプレーできた事は、一生の自分の誇りである。

今の小学生に伝えたい事、それは「3つの恩」である。1つ目は「社会への感謝」。2つ目は「親への感謝」。3つ目は「師への感謝」である。自分もまだまだ皆に言えるほどの立場では全くないが、一人で野球しているのではなく、たくさんの人、仲間のお陰で野球ができていた事を忘れないで欲しいと思う。



## 甲子園の思い出 —九年間の思い出—

元 塩焼少年野球部  
篠崎 敦彦

私が野球を始めたのは小学四年生からで、近所の中でも強かった塩焼少年野球部に入りました。そもそも野球を始めたきっかけは、小さい頃父とキャッチボールをやるのが楽しくて、父に勧められて塩焼に入りました。

塩焼に入ると、時には厳しく時には優しい秋本監督と出会い、野球の基礎から色々教えて頂きました。

小学六年生になるとキャプテンを任せられました。キャプテンになる少し前からキャッチャーになりました。キャプテンになってからはとても大変でしたが周りの支えもあり、なんとか一年間やり遂げられました。小学生の頃の思い出で一番の思い出は、市川市の大会で春・夏の大会を優勝することができました。この時、野球をやってきて良かったと思いました。優勝した時はただ嬉しかったのですが、今考え直すと、監督やコーチ、父母の方々に心から感謝しています。

中学に進学してからも野球部に入部し、野球を続けました。中学入学当初から高校は市立船橋高校に進学して、市船で野球をやりたいと思っていました。中学での野球は、周りを気にせず自分だけうまくなりたいと思って毎日練習に励んでいました。中学三年になると市川市選抜にも選ばれて色々な経験をすることができました。中学では、精神的にも身体的にも大変成長することができたと思っています。

そして高校は憧れの市立船橋高校に進学することができました。市船に入学すると、とにかく練習が厳しく、入学当初はボールを使った練習をやらせてもらえず、とにかく基礎体力をつける練習ばかりでした。一年生の8月から本格的に練習をすることができ、とても嬉しかったのですが、周りのレベルが高くとてもついていくことができませんでした。二年生の8月になると、自分達の代になり、チームの中心で練習ができるようになりました。しかし、8月の合宿中から練習を外されてしまい、12月まで毎日ゴミ拾いやボールの修復などをしていました。三年生になると監督が替わり、ユニホームも昔に甲子園出場した時のものになり心新たにチームの士気も上がって最後の大会に望むことができました。私は、背番号2を着けて大会に出ることができました。チームは無事に勝ち上がることができ、千葉県大会決勝に進めました。決勝の相手は木更津総合高校で、相手のエースは、小・中と一緒に野球をやってきた田中でした。試合は、田中を打ち崩し九対一で勝利することができ、甲子園に出場することができました。

今まで野球をやってきて、一番の思い出は甲子園出場ですが、野球というのは技術だけでなく、人間関係や精神的に大変成長することのできるスポーツというのがわかり、自分を大きく成長させてくれたかけがえのないものです。



## 甲子園の思い出

元 稲荷木イーグルス  
岡 崎 嵩

私が野球を始めたきっかけは、四歳年上の兄が野球をやっているのを見ていて気がついたら野球を始めていました。

稲荷木イーグルスに入ったのは幼稚園年長の頃で、野球が好きで毎日でも野球をしたいと思う気持ちは今でも変わりません。

兄の年代はサッカー人気の影響で部員が少なく、キャッチボールが何とか出来た小学2年の終わりの頃から高学年のチームで外野等に入って練習や試合に参加していました。

ピッチャーをやりたいと思ったのは、兄が投げているのを見て自分も何時か投げて見たいと目標にしていました。

初登板は小学2年（1998年3月21日春分の日）に先発し、最後まで投げ結果は1対22で大敗したことを今でも鮮明に記憶しています。この大敗で、どうしたら打たれないのかどうしたら打つことが出来るのかを考え始め、シャドーピッチングや素振りを繰り返し、徐々に打ち取ることやバッティングに成果が現れ、その頃から試合が楽しくなっていました。

小学3年の時、市内大会低学年の試合に先発し決勝まで勝ち進んでいきましたが結果はコールド負けでした。その時の相手ピッチャーは同じ学年で、その頃のイーグルスは負け知らずの状態での敗戦は皆で大変悔しい思いをし、何時かリベンジしようと練習に励んだように記憶しています。

6年生になった時、県大会に勝てば少年野球にも全国大会があるということを知り、全国大会に出ようという目標が出来てからチームの練習に熱が入っていったように思います。

その年の市川少年野球はレベルが高く、自分の中では市川市で優勝出来ればもしかしたら全国に行けるかもしれないと思っていました。市内大会は決勝まで勝ち進み、対戦相手は3年の時にコールド負けしたチームでした。

この試合には絶対に負けたくないという気持ちでマウンドに立ち、チームメイトの得点を守り念願の優勝とライバルチームに勝つことが出来ました。

千葉県大会にも優勝し、チーム目標の全国大会出場切符を手に入れることが出来たのは代表・監督・コーチ達の指導はもとより、選手一人ひとりが目標を達成するためにチームの中で自分が何をしたら良いのか、何をしなければいけないのかを練習目標にした成果が出た試合だったと思います。



## 甲子園の思い出

元 中国分イーグルス (現ドリームス)  
古川 翔

30周年 誠におめでとうございます。このような形で、お祝いできることをとても光栄に思います。

少年野球は私の原点です。振り返ると、辛い練習、監督やコーチ、スタッフの方々からの厳しい言葉が思い出されます。今までの野球人生の中で一番厳しかったのが少年野球の頃だったと思います。少しでも気を抜いたプレーをすると必ず怒られていました。特に、弱気なプレーをした時は、鬼の形相で怒られたのを覚えています。しかし、怒られた理由を探してみると全て自分にあり、怒られないためには何をすればいいか考えました。一番大事なのは自分のプレーに自信を持つという事に気づき、学校が終わると毎日のように友達と野球の練習をして、自分の技術に自信が持てるようになってから、更に野球が楽しくなりました。

自分達の頃は、他のチームにすごい選手が沢山いましたし、チーム力的にもどのチームが優勝してもおかしくない状況でしたので、毎試合必死でした。周りが強いというのはとても大事なことで、普段の練習にも熱が入り、とても充実した日々を過ごさせていました。そうしているうちにチームはどんどん強くなり、県大会へ出場できました。あの時の、喜び、興奮は忘れられません。嬉しい事ばかりではなく、何かの大事な大会で若宮アポロに負けた時は、本当に悔しく、家に帰り一人で一時間以上泣いていたのを覚えています。

自分に携わってくださった方々に心から感謝していますし、中国分イーグルス (現ドリームス) でプレーしていたことを誇りに思います。

高校では、春夏甲子園へ出場しました。あんなに広い球場で野球をしたのは初めてでした。球場入りすると、甲子園の独特な雰囲気にも圧倒されました。そしてあれだけの観衆の前で野球ができるということは、とても喜ばしい事でした。

しかし、甲子園で強く思った事が一つあります。甲子園で観衆が湧く場面がありますが、あれは好プレーの時に起きるものです。観客を感動させるには、野球が上手くなければなりません。技術がなければ好プレーは起きないし、精神面が弱いと技術は発揮できません。私は甲子園で、野球は魅せられるようになって本物というのを学びました。そのために必要な事を練習して、これからも頑張っていきたいと思います。

最後に私が一番大切だと思うのは、いつ、どんな時でも野球を好きでいることだと思います。



## 甲子園の思い出 —私の原点—

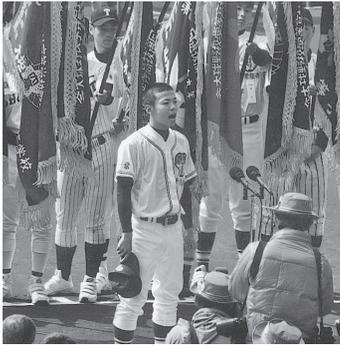
元 塩焼少年野球部  
田 中 優

私は小学校一年生の春から野球を始めました。始めたきっかけはプロ野球のテレビ中継を見て「格好いいな」と思い私もプロ野球選手になりたいと思ったのがきっかけです。そして私は小学校に入学したと同時に、地元の塩焼少年野球部に入部しました。塩焼少年野球部はとにかく厳しく、練習量も他のチームより多かったと思います。当時はナイター練習、火・木の夜六時から九時までの三時間、そして日曜祝日は朝から一日中やっていました。練習内容はとてもレベルが高く非常に意味のある練習だったと思います。私が塩焼少年野球部に入部した理由は、一つはとても強いチームだと聞いて私もそんなチームの中で野球がしたいと思ったからです。そしてもう一つは、監督が凄い指導力のある方と聞いたからです。その二つの理由が私が塩焼少年野球部に入りたかった理由です。そして私は、小学校一年の春ナイター練習で初めてチームの練習に参加しました。その時に挨拶したのが、私と秋本監督との初めての出会いでした。そしてその日から私は秋本監督の下で六年間野球をやらせていただきました。その六年間は非常に短く感じました。短く感じたという事はとても充実していたからだだと思います。私が在籍した六年間で、数々のタイトルを獲得しました。それは仲間に恵まれ、自らも努力し、そしてなにより監督の指導があったからこそここまで勝てるチームになれたのだと思います。そして私はこの六年間で、野球の楽しさ、努力の大切さ、親の有難さを学びました。その学んだ事を忘れずに私は中学、高校、大学に進学してからも野球をしています。私は高校時代、木更津総合高校で私の目標であった甲子園に出場する事が出来ました。そんな強豪校に入れたのも秋本監督が高校側に勧めてくれたからです。それに忙しい合間でも、私が投げる試合に応援に来てくれて、甲子園にまで足を運んでくれた時は本当に嬉しかったです。そして現在は東京六大学の明治大学に進学し野球をしています。今度は大学野球の聖地、神宮球場のマウンドで私が投げている姿を見てほしいです。またその姿を見せる事が私の秋本監督に対する恩返しだと思います。

これは少年野球をやっている皆さんに言いたいのですが、野球は決して一人では出来ないと言う事です。監督、コーチ、仲間、そして家族がいるからこそ何一つ不自由なく野球が出来るのです。その中でも最も感謝しなければいけないのが両親だと私は思います。親がいるからこそ自分の好きなグローブ、スパイク、バットなどがあり、練習のある日はお弁当を作ってくれたり、試合のある日は応援に来てくれたり、野球を教えてくれたり、他にも沢山感謝しなければいけない事があると思います。その感謝の気持ちを表すには、一生懸命努力し、常に全力プレーをする事が両親に対する最高の恩返しだと私は思います。

最後になりますが、今までこんな私を応援してくれた人達に本当に感謝しています。私の原点は少年野球です。野球を知ったのも、野球を始めたのも、野球の楽しさを分ったのも全てが少年野球です。なので今でも私は、調子が悪かったり、悩んだ時は私の原点である少年野球時代の気持ちを思い出してきました。そしてこれからも「原点」を忘れずに頑張っていきたいと思います。

私の夢であるプロ野球選手を目指して。



## 甲子園の思い出

元 新浜野球部  
飯 窪 宏 太

私は平成13年度新浜野球部の卒業生です。私は父の勧めもあり、小学校1年生から野球を始めました。野球がない平日も野球をして遊ぶようになり、私はたちまち野球が大好きになりました。私の野球に対する気持ちが変わったのは小学校3年生の夏のことでした。夏の甲子園で松坂大輔選手を見て、「私もこの甲子園球場で野球がしたい」と思いました。それまでは、楽しいからとしていた野球でしたが私の野球に「夢」ができました。夢に向かい夢中でボールを追いかけ続けました。

そして、高校生になり千葉経済大学附属高等学校に入学し野球部に入部しました。高校に入ってから野球は決して楽しいことばかりではありませんでした。練習も辛く、いつしか甲子園のことなんか忘れてしまっている自分がいました。ただ、毎日の練習をこなしているだけになってしまっていたのです。そんな中、先輩が甲子園に出場し甲子園を見に行きました。すると私の中に眠っていた夢がまた甦ったのです。私は、「必ずここに帰って来る！」と強く思いました。そして私は、自分の代になり主将を任されることになりました。最初は不安でいっぱいでしたが、「夢に近づく為なら」と思い積極的に務めることができました。そして私達のチームは関東大会優勝・神宮大会ベスト4という成績を残し、第79回選抜高等学校野球大会の切符を手に入れました。甲子園が決まった時の喜び、夢が叶った時の喜びは今でも忘れることができません。出場できただけでも、とても嬉しかったのですが、抽選回で選手宣誓のくじを引き当て、私自身が甲子園で宣誓をすることになったのです。開会式までの間、私は自分の小学生から抱いていた気持ち、今自分が抱いている気持ちを宣誓の文章にこめました。そして、開会式当日宣誓を行いました。

「宣誓 契りを交わした仲間と共に、大好きな野球をこの夢舞台でできることに感謝し、日頃お世話になっている方々に、今自分達ができる最高のプレーでこの気持ちを伝えます。そして、出場選手全員が平成生まれの選抜大会で、浜風に負けないくらいの強い平成の風を吹かせ、その風が全世界に勇気と希望を運ぶ大会にすることを誓います。」

と宣誓しました。私にとって一生の宝物となりました。私にとって甲子園は、私自身の夢であり、私を成長させる場所でもありました。

今、少年野球をやっている後輩達に伝えたいのは「夢を持ち続けること」です。夢は自分自身を強くします。夢は努力を絶対に裏切りません。みなさん夢はなんでもいいです。夢を持って下さい。夢に向かって、一生に一度しかない小学校生活を送ってください。応援しています。

最後に、市川市少年野球連盟のみなさん30周年おめでとうございます。これからも、益々のご発展を祈念しています。